

令和2年度

当協会職員(※)による投稿論文の一部をご紹介します。論文には共著も含まれます。

執筆者 大串俊太郎※

題目 長崎県におけるトゲミズギワカメムシの記録

投稿先 長崎県生物学会誌, No.86, pp.27-28

要旨 トゲミズギワカメムシは、体長 2 mmほどの水際に生息するカメムシ類である。筆者は、長崎県佐世保市内にある湿地帯で本種 1 個体を採集した。本県における本種の採集記録は見当たらないので報告する。同採集地では継続的な調査を行っているが追加個体は得られておらず、生息密度は低いと思われる。ミズギワカメムシの仲間は長崎県に限らず分布情報が不足しているものと思われ、今後も類似種を含めたモニタリングが必要である。

執筆者 Shin-ya Ohba, Shuntaro Ogushi※

題目 Larval feeding habits of an endangered diving beetle, *Cybister tripunctatus lateralis* (Coleoptera: Dytiscidae), in its natural habitat

投稿先 Japanese Journal of Environmental Entomology and Zoology, Vol.31, No.3, pp.95-100

要旨 コガタノゲンゴロウは体長約 30 mmの大型ゲンゴロウの一種で、一時期は農薬や生息地の消失等により急激に数を減らしたが、近年になって個体数が急増している。水生昆虫の多くが減少の一途をたどる中、本種が増加傾向にあるのは興味深い。本研究では、コガタノゲンゴロウの基礎的な生活史を解明するため、本種幼虫の食性に着目し、①餌となりうる水生生物の発消長、②実際に捕食していた餌生物を調査した。調査の結果、①幼虫の発消長はトンボ類の幼虫(ヤゴ)とオタマジャクシのそれと一致したが、②実際の餌生物調査では、主にヤゴを食べていた。このような節足動物を中心とした食性は、現在減少傾向にあるナミゲンゴロウやクロゲンゴロウと一致するもので、増加傾向のコガタノゲンゴロウと餌をめぐる種間競争が起こっている可能性がある。

執筆者 林成多, 大井和之※, 八幡浩二, 佐藤仁志

題目 隠岐島後におけるオキサンショウウオの分子系統解析

投稿先 ホンザキグリーン財団研究報告, Vol.24, pp. 65-67

要旨 島根県の隠岐諸島島後に生息するオキサンショウウオの遺伝的多様性を、ミトコンドリアの *cytb* 遺伝子 (1,140bp) を対象に分析した。7 地点の各 1 検体から、それぞれ異なるハプロタイプが確認された。移動性の小さなオキサンショウウオでは同じ島内でも遺伝的に分化している可能性がある。

執筆者 大井和之※, 岸しげみ, 一ノ瀬友博

題目 藤沢市内に生育するクゲヌマランの遺伝子解析

投稿先 神奈川自然誌資料(42), pp. 33-38

要旨 神奈川県藤沢市の鶴沼海岸産の標本をもとに名付けられた「クゲヌマラン」は現在ではヨーロッパからアジアに広く分布する種であることが明らかとなっている。従来、海岸砂丘の樹林下などに生育する希少な植物であったが、2000 年頃から造成地や公園の常緑樹林下で多く確認されるようになってきた。藤沢市内の従来からの生育地と新しい生育地(慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス)のクゲヌマランの遺伝子を解析したところ、どちらも同じ遺伝子型で、日本在来のものであり、ヨーロッパ産の外來系統ではないことが判明した。クゲヌマランの分布拡大の要因は、遺伝的な系統の違いよりもラン科植物の種子発芽にかかわる菌類相の発達状況が影響している可能性が考えられる。

執筆者 大井和之※, 大西亘

題 目 DNA バーコーディングで明らかにされた真鶴半島におけるビロウ *Livistona chinensis* (Jacq.)R.Br.ex Mart.(ヤシ科)の野生化

投稿先 神奈川自然誌資料(42), pp. 129-134

要 旨 神奈川県立自然公園の真鶴半島において近年増加しているヤシ科植物の実生について、DNA バーコーディングにより南西諸島から九州・四国に自生するビロウであることを明らかにした。本州におけるビロウの野生化の報告はこれまでなかった。公園に植栽された株由来と考えられるが、親株や由来の確認にはマイクロサテライト等によるさらなる調査が必要である。

執筆者 中島淳, 大井和之※, 富充弘, 伊地知告

題 目 鹿児島県奄美群島喜界島におけるギンブナとキンギョの採集記録

投稿先 伊豆沼・内沼研究報告, Vol.14, pp.103-111

要 旨 鹿児島県奄美群島に属する喜界島において、2018年10月にコイ科の淡水魚であるフナ属を2個体採集した。採集個体の形態及びミトコンドリア DNA 調節領域の特徴を調査した結果、この2個体はそれぞれギンブナ *Carassius langsdorfii* およびキンギョ *C. auratus* に同定された。喜界島におけるフナ属の記録はおよそ80年ぶりとなる。これらはいずれも人為移入に基づくものと推察された。

執筆者 中島淳, 西村俊明, 井藤大樹, 宮崎淳一, 大井和之※, 平川周作

題 目 福井県嶺北地方で発見されたナガレホトケドジョウの新たな地域集団

投稿先 Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, Vol.6, pp.33-37

要 旨 福井県嶺北地方から新たに発見された、ナガレホトケドジョウの既知の集団とは mtDNA *cytb* 領域の塩基配列が明確に異なる遺伝的集団を報告した。この個体群は、これまで日本で知られていた本種の2つの個体群と比較して、形態的特徴も明らかに異なっていた。

執筆者 岡部海都※, 鮫島正道

題 目 喜界島におけるオニカッコウの夏期の観察記録

投稿先 Nature of Kagoshima vol.46, pp.515-518

要 旨 筆者らは、2019年6月～7月にかけて、喜界島において複数のオニカッコウを観察し、撮影及び録音した。繁殖期におけるオニカッコウのつがいと思われる記録は沖縄県に続くものであり、本種の分布拡大を示す重要な観察記録と考えられる。